

少年中国主義の成立と展開

——新文化運動期、王光祈の社会改革論——

永見和子

はじめに

少年中国学会(以下「少中」と表記する)は、中華民国北京政府下において、1918年6月末に王光祈(1892~1936)・曾琦(1892~1951)・李大釗(1889~1927)ら7人により発起され、翌年、五四運動直後の7月1日に正式に成立し、1926年3月に活動を停止した青年知識人の組織であった¹。会員数は、116名で²、わずかに7年9ヶ月存続しえたのみであったが、台湾の王汎森氏は、「同時期の青年に対して非常に大きな影響を与えた」と、評価している³。

「少年」とは、青年を意味する中国語である。当時は、新文化運動期から国民革命への転換期に当たり、青年は中国の革新を担う新しい力として囑望されていた。全国各地の優秀な青年知識人が、中国社会の改革を目指して、「少中」に結集した。「少中」の根本精神は、規約第2条、本学会宗旨(以下「宗旨」と表記)に表示されていた。それは、1918年の発起時の「旧宗旨」から1919年の成立時の「新宗旨」へ、内容・表現ともに変化し発展している。今日「少中」の「宗旨」として一般に知られる「新宗旨」には、「科学的精神にもとづき、社会的活動を行い、少年中国を創造する」と簡明に「少年中国」を創造することを目標に掲げていた⁴。「少年中国」とは、彼ら青年が創りあげる20世紀新時代の国家である。少年中国主義は、この「宗旨」にもとづき、彼ら会員が試み、内外に表明した中国社会改革論である。

「少中」の発起者である王光祈、曾琦らは、自分たちの組織を、「全国の青年を集合し、中国に新たな生命を創造して東亜に新紀元を拓く、中華民国青年運動の団体である」と位置づけた⁵。彼ら会員の背後には、彼らを支持する知識青年が全国規模で存在した。発起者の1人である張夢九(1893~1974)は、「少中」が極めて短期間のうちに全国にその名を響かせることができた要因の一つとして次のような当時の青年の状況を挙げている⁶。

当時は五四運動後で、世界の新しい動きが日に日に変わっていくのに

対し、中国の政治は暗闇のままであった。だが、社会各方面には、微かな曙光がさしてきていた。全国の青年は新しい知識と出口を求めて、みな非常に敏感であった。ここにおいて、本会は一般青年のあこがれの対象となったのである。

しかし、1920年代に入り、「少中」内部では、根本理念である「宗旨」に対する異論が提出されるようになり、動揺が発生した。「少中」内の動揺は、国民党・共産党の政治運動・革命運動が起こる大きな時代転換を反映しており、まさしく次の時代への変化を示していたのである。

1. 従来の研究の成果と課題

「少中」は、これまで主に五四運動や新文化運動の評価と関連し、その歴史的な位置付けが論じられてきた。しかし、今日の中国において、その新文化運動への視点が画期的に変わりつつある。近年の主要な変化についてまとめると争点が明確になってくる。

1988年に、余英時氏が中国共産党の新民主主義史観を批判したことを嚆矢とし、新文化運動に対する批判的な再検討が本格化した。1980年代以降、新文化運動は全面的な批判にさらされた⁷。これに対して、2004年、袁偉時氏は、自由主義からの新文化運動非難論を概括して3か条にまとめた。即ち、新文化運動は、①「プロレタリア文化大革命」の根源である、②その主導思想は無政府主義である、③極端な思想の氾濫と国民党の独裁政治成立へ導いた。袁は、これらに逐一反証し、新文化運動の基本精神は、自由、法治、憲政、理性であったとした。自由主義派の「文化は改造できない」という主張に反論して、今日の中国において、この未達成の制度文化を取り入れ、世界の普遍的価値を根付かせることが課題であると主張した⁸。

2008年、耿雲志氏は「1910年代の新文化運動により提起された科学と民主の観念、世界化と個性主義の観念と方向性が、現在なお中国文化の近代的転換を語る際の基本的な基盤である」と評価し、「新文化運動が、近代中国の文化転換の要である」という新しい見解を表明している⁹。

以上のような新文化運動研究の展開を受けて、少年中国学会研究にも新たな視点が導入された。小野信爾氏は、1989年の学生運動に現地でも遭遇し「未

だ五四の精神が課題とされる」中国の現実に触発されて、1990年、啓蒙主義の観点で王光祈論を書いた¹⁰。同氏は、五四運動前後の王をアナキストとみている。石川啓二氏も「少年中国学会の精神は、素朴な大同思想、ユートピア的アナキスティックな社会主義である」とみなす¹¹。

アナキストの運動とみなした前記の研究に対して、2007年、牛嶋憂子氏は、『王光祈文献総目録』を編纂、音楽史家王光祈の生涯の事業の研究に向けて実証的基礎を据えた。同氏は、少年中国学会を文化学術団体と規定し、王光祈研究の有する多面性には、既成の枠に統一できない複雑な民国期の思潮を見出すことができると指摘した¹²。

中国では2006年、これまでの内外の少年中国学会研究を踏まえた呉小龍氏の『少年中国学会研究』が出版された¹³。呉氏は、「学術の独立」「思想の自由」の原則を主張した自由主義の団体として「少中」を評価しなおした。「少中」の実像が「覆われてきた」と考えた呉氏は、会の中に、共産主義グループ、国家主義グループと並んで多数の学術専門家を志すグループの存在を指摘し、後者のグループの自由主義を高く評価した。呉氏の見解は、袁偉時、耿雲志両氏の新文化運動評価に連なる。「少中」研究において心したいことは、彼らが修学途中で、未だ思想形成過程にあったことである。呉氏の研究は、青年期にある未熟な彼らの思想的探求に対し、断定的ではなく極めてソフトな接近により彼らの真実を導きだそうとしたことに特徴がある。

筆者は、「少中」が、発足当初から、呉氏の指摘するように「個性の解放」「個人主義」に立ち「学術の独立」「思想の自由」を主張した自由主義の団体であったことに同意するが、「少中」の基本的性格は、知識青年による社会改革を目指す組織であり、運動であったことを挙げるべきと考える。というのも、「少中」は、会の中で「少年中国の創造」にいかに取り組みかという課題に一貫して取り組んだからである。その背後には、彼らが認識していた当時の中国の危機的状況があった。

しかし、社会改革の根本理念をまとめた「少中」の「宗旨」は、これまで極めて低い評価を受けてきた。台湾の陳曉林氏は、「少年中国の創造」の課題は、理想主義によるユートピアであるとした¹⁴。一方、革命史の観点からは、「学会の綱領は、極めて曖昧であり、組織の目的が不明確であった」という否定的

なものであり、そのため、「宗旨」の本格的な検討もおこなわれてこなかったのである¹⁵。初めて、本格的な「宗旨」の検討をおこなった呉氏においてさえも、その社会改革論としての完成度に否定的である¹⁶。

「少中」に共有される広い理想の追求を、「少年中国主義」というなら、それはいえないことはない。しかし、この少年中国主義の説得力は、増大しなかった。中国の改革ビジョンは遅延として定義できず、その完全に整った理論表現が無かった。

また、これまで、少年中国主義は、李大釗のそれが注目され、李の思想形成の側面から論じられており¹⁷、「少中」や王光祈個人のそれは、省みられなかった。実は、最も少年中国主義の理論形成にこだわり、「少中」の運動とともにその内容を整備してきたのは王であった。

王の人物像については、1970年代に、郭正昭氏が、「過渡人」という理論で王の人物像の究明に迫ろうとした¹⁸。民国期の知識人王は、根本においては、前代の士大夫気質から脱し切れていない。しかし、彼の中国社会認識と社会改革に向けた理論形成は、西洋学術受容期という時代の制約を受けつつも、それを乗り越え、中国独自の道にこだわって探求した過程であった。

社会改革を探求した少年中国主義は、「少中」の活動休止により、結果としては、理論的完成を見ることなく不首尾に終わってしまった。しかし、結果は如何であれ、その活動期間をたどり、「少年中国の創造」をめぐり彼らが直面した諸問題を分析することは、彼らの真摯な実践を発掘することである。

しかも、その歩みを見ると、彼らが生きた民国期が中国近代を拓く豊かな可能性を持った時代であったことを示しており、時代転換期における複雑で多様な中国近代諸思潮の萌芽をそこに見出すことができる。以下では、その探求の第一歩として、「少中」の根本理念である「宗旨」と王の少年中国主義をとり上げ、その社会改革論がもつ歴史的意味の解明を目指したい。

2. 少年中国学会の根本理念の検討

(1)少年中国学会の成立と王光祈

少年中国学会の成立の経過について、ここで簡単に触れると、1918年、日本留学生の日中軍事協定反対運動において、留学生の「一斉帰国」運動が起こ

った。日本の中央大学に在籍していた曾琦ら日本留学生が帰国して学生愛国会を北京に組織しようとしたことが、直接の契機であった。

曾琦は、四川省成都の高等師範附属中学堂の同級生である王と日本滞在時に連絡を取っており、北京にきた曾琦に対し、王が愛国会に代わる青年組織の創立を提案した。四川省出身の王、曾琦、張夢九、陳愚生(1889～1923)、周太玄(1895～1968)、雷宝菁(1900～1918)の6人が、日本留学生出身で北京大学の図書館主任の李大釗を誘い7人の発起人で出発し、会の名称や規約70条を定めた¹⁹。

当時は、新文化運動期であり、陳独秀は1915年の『青年雑誌』(翌年『新青年』と改名)創刊号を皮切りに、青年に個の覚醒を熱烈に呼びかけていた。王は、当時北京の私立中国大学を卒業し、清史館に勤務し、成都の『群報』の北京通信員をしていた。陳独秀、李大釗が、1919年12月末に創刊した時事週刊誌『每週評論』の編集人にも連なり、すでに若手言論人としての名声を有していた。

「少中」が発足した1918年は、国内外とも戦乱が止み平和への転換期であった。9月に新しく選出された大總統徐世昌によって南北の戦争の終結が宣言され、11月には、第一次世界大戦の休戦が実現した。1919年1月末には、停止されていたヨーロッパ航路も復活した。ヴェルサイユ講和会議が1月から開催され、国内では4月から、全国統一を協議する南北会議も上海で開催されていた。そして、5月、山東問題をめぐる学生の五四運動が勃発しやがて六三運動として全国に波及した。

「少中」は、1919年春、連続講演会を開催し、中国古典文化の大家章太炎と新文化運動の指導者陳独秀、胡適を講師に迎えた。章太炎は、青年の陥りがちな安易な理想追求を戒め、過去の人物や文化へ依存しないよう忠告した。胡適は、「少年中国の精神」と題して、科学的方法を身につけた「批評精神、冒険進取の精神、社会協調の精神」による人生観の形成を唱え、新しい少年中国の精神により、中国を再生しようと激励した。陳独秀は、「我々は如何にすべきか」と題し、時代の転換期にあたり価値観の煩悶に陥っていた当時の青年を思いやりつつ、楽観主義や悲観主義を排して、「愛世努力の改造主義」の人生観を提唱した。彼ら先達は「少中」を強く応援したのである²⁰。

新文化運動期の個性解放思想の影響を受けながらも、発起人である曾琦や王は元来、宋明理学を学問的基礎にもち、さらに、梁啓超が紹介した前世紀ヨーロッパの青年イタリアの民族主義運動にも影響を受けていた²¹。また、王が社会改革の必要性を自覚し始めるのも、政治活動から社会活動に転換することを表明した当時の梁啓超の影響を受けたためであった。彼は自分が社会改革に目覚めた経緯を次のように語っている²²。

私は、民国 3 年に四川から北京へ来た時、国家が弱体なのは、すべて外力が圧迫するからであると常に考えていた。それ故、外交の研究を志し、以前の「青年イタリア」党のカヴールを自任して、数年変わらなかつた。民国 6・7 年の境ごろ、外力が圧迫するのは内政の腐敗によるもので、内政の腐敗は社会が麻痺しているからだ。それ故に中国を改造するには、まず社会から取りかからなければだめであると突然気づいた。

カヴールを尊敬していた王が、1917・8 年の境に「社会」の存在を発見するには、辛亥革命後の政治状況や当時の新語「社会」の流行があつた²³。さらに、政治活動の度重なる失敗で打撃を受けた梁啓超は、1915 年「政治の基礎は社会にあり」「今後は社会事業に取り組む」と表明した²⁴。王が、この頃の梁啓超の言動に注目していたことは、1922 年に、政治活動に反対し社会活動を主張した時、梁啓超を「社会的政治改革」の例に採り上げていることから知られる²⁵。

新文化運動を推進した『新潮』社の傅斯年是、中国の現実に関する洞察を深め、雑誌『新潮』で「中国には社会がない」と主張していた²⁶。当時、彼と同時期到北京で活動し、深い交流を持った王もその認識を共有していたことが窺える。

発起から正式成立までの「少中」の準備活動を一手に任された王は、北京大学の聴講生でもあり、『新潮』『国民』の活動家たちが「少中」へ入会したのは、王とともに、彼らに当時影響力のあつた李大釗の力が大きかつた²⁷。一方、曾琦、張夢九は上海で学生救国会の『救国日報』を発行しており、四川の同郷人や上海の震旦学校時代の友人たちを誘つた。李劫人(1891～1962)は成都分会、左舜生(1893～1969)は南京分会を組織した²⁸。海外では、田漢(1898～1968)が東京分会を、後にパリ分会も成立した。

当時、全国各地の有為の青年が、五四運動を通じてネットワークを形成し始めていた。青年グループの指導者に対して「少中」への参加を意識的に働きかけたのは王であった²⁹。彼らの中から、王のドイツ留学後「少中」の運動を担った蘇演存、鄧仲澥(中夏)、惲代英、陳啓天ら多数の新人が出た³⁰。「少中」の社会改革を目指す活動は、このような青年たちに担われたのである。

(2) 少年中国学会発起時の根本理念

「少年中国学会」という会の名称は、王が提案した。発起時に作成した規約原案は、王が提案し、発起人の間での長時間の論争をへて正式な成立をみた。「少中」の根本理念は、規約第 2 条の「宗旨」に明記され、「本学会は、少年精神を奮い起こし、真実の学術を研究し、社会事業を發展させ、末世の風気を転移することを宗旨とする」とされた。次の第 3 条には、本学会の信条として 4 項目の「奮闘、実践、堅忍、儉朴」が明示されており、会員の遵守すべき倫理道德であった³¹。

「少中」が翌年正式に成立した際、改正されるこの 1918 年の「宗旨」、即ち「旧宗旨」は、活動内容が具体的に表示されていたことが特徴である。会員には、人格的に優れた人物を選び、社会の道徳的模範となるべく人格の修養が重視された³²。

準備期の主任である王は「旧宗旨」の 4 項目を次のように説明している³³。第 1 の「少年精神を奮い起こす」とは、中国の社会改革の担い手として期待されていたのが、独立した精神を有する青年であり、彼らを啓蒙し励ますことであった。

第 2 に「真実の学術を研究する」は、会員は、すべての事柄を学理に基づいて考え処理することで、これが会員の行動の基準であるとした。規約には、会員に「文科、理科、工科、農科、医科、商科、政治科、法律科、経済科」のうちいずれかの科目を選んで研究することを義務づけた。この科会の名称から窺えるように、伝統的学問からはすでに脱皮し、西洋近代の科学技術を学ぶことを目的とした。王、李大釗は経済学、曾琦は政治学の専科に属していた³⁴。

第 3 に「社会事業を發展させる」は、「文化教育事業」をさし、月刊誌の発刊、

通信社の組織、少年中国叢書の発行が実行に移された。学術研究の成果を社会事業に生かすという学術と研究を2つの柱にした「少中」は、当初から学術研究の性格の強い組織であった。

第4の「末世の風気を変える」は、4項目の信条と第14条の禁止項目を奉じて、身をもって努力実践、切磋琢磨して、「汚濁」の風俗を変え、社会の善良な風気を養うことであった。第14条の禁止項目では、不道德行為や政党への接近、加入を禁じた。「少中」には、厳格主義の雰囲気があった。

準備期間中であった1919年1月、上海の会員は、王を北京から招き、「少中」の今後の活動方針を討議した。主要な議題は、発起以来の課題である「主義の確定」をどうするかであった。王が行った「宗旨」に関する説明は、会員全員の理解と賛成を得た。その結果、「宗旨」に表現された根本理念の理解において、会員は完全に一致していることが確認された。そこで、「根本がすでに完全に同じであるからには、いわゆる主義は末節に過ぎない」と結論した³⁵。加えて、李璜の「以前の改革は上からの改革だが、我々の改革は下から大多数の人々の幸福を求めて行う」という平民主義も採択された³⁶。

「少中」では、発起時から7人の発起人の間でも「主義」は全く一致できなかった。それゆえ、「宗旨」と主義の関係がこの時確認された意義は極めて大きい。即ち、会員各自が自由に自分の主義を持つが、「少中」の「宗旨」は、その上に立つ原理であるとされた。「宗旨」は「少中」の根本理念となった。以後、多様な思想を持つ構成員を包摂する組織へ脱皮したのである。

(3) 1919年の「宗旨」(新宗旨)の新たな展開

1919年7月、五四運動直後の成立大会で、規約第2条の「宗旨」が「科学的な精神にもとづき、社会的活動をなし、少年中国を創造する」へ、字句が改正された。これが、「少中」の「宗旨」として、一般に知られているものである。「旧宗旨」が具体的な活動内容を明記していたのに対して、「新宗旨」は簡潔で、理念を表現したものである。

王の報告³⁷によると、成立大会は、7月1日陳愚生宅で開かれた。当時の会員は42名になっていたが、会員の多くは五四運動に参加し、全国に運動拡大のため出かけていたので、定数に足りず、当日の参加者の氏名も人数も

公表されなかった。このとき、改正された「新宗旨」を提案した6人は、王、曾琦、李大釗、陳愚生の発起人4人に加え、新入の康白情(1896～1959)と雷宝華であった。康白情は、当時の事情について「慌しい中で、「宗旨」の改正を提案した」と述懐している³⁸。このことから推測すると、6人が協議しての改正であったが、成立大会では、改正の内容の説明や討論はなかったと見ることができる。会員への説明では、「旧宗旨」と内容は同じで、ただ表現を簡潔にただけだと王は言うが、その間には後に「少中」の進路をめぐる論争を引き起こす重要な変更が行われていた。

呉氏は新旧の「宗旨」の変化から、「彼らが、伝統的士大夫から現代知識人への役割転換の過程にあった」と見る³⁹。五四運動、新文化運動の展開、新メンバーの加入という「少中」をめぐる大きな変化は、新しい時代の反映であり、思想の新しい要素が盛られたと解説している。呉氏の「両者の違いを自覚しないほどの会員自身の精神的高揚があり、彼ら自身の社会転換があった」という指摘は、耿雲志氏のいう文化価値の転換過程が、そこで見られるということである。

しかし、五四運動をめぐる各地の運動の温度差、学生運動に対する見解の違いから、当然ながら、この時の社会転換の意識は、「少中」成員に同じようにもたらされたわけではないと筆者は考えている⁴⁰。根本思想である「宗旨」に対し、新旧会員間で一致した理解が難しくなっていたであろう。そこでこの点をより深く考えるために、「科学的精神」「社会的活動」「少年中国の創造」という「新宗旨」の新しい要素を、以下に採り上げる。

① 西洋近代の科学的精神に則ることを宣言

「新宗旨」は、「旧宗旨」の「學術」という表現から転じて、西洋の「近代科学の精神」を明示している。西洋科学の成果とその新しい科学的方法論を取り入れる活動を提唱し、調査研究を重視した。入会した会員の多くは、新しい学問を求めて続々とヨーロッパ諸国、アメリカへ留学し、各地から、その地で獲得した新知識を通信や原稿にして送ってきた。留学先の国の違いにより、会員の思想的傾向は異なっていた。

② 社会的活動の提唱

「社会事業」から「社会的活動」に転じたことで、準備期よりも広範な社会改

革の意図を包摂することが可能になった。全体的に実践重視の傾向が強まった。しかし、王の観念の中での社会的活動は、いわゆる社会活動であり、政治活動は含めなかった。彼にとっては「新宗旨」の「社会的活動」も、「旧宗旨」の社会事業の内容と変わらず、教育と実業に従事することを意味した。王は会員の大部分が当時、教育活動を志望していたことから、社会的活動の範囲は教育宣伝活動に特定されているとみていた⁴¹。

しかるに「少中」には、政治運動である五四運動に参加し、きわめて政治的関心の強い民族主義者が多数参加してきた。彼らにとって会員を縛る「政治活動をしない」という規定は、本来ありうるはずがなかった。にもかかわらず、「少中」規約では自らを社会活動団体として定義しており、第15条には、「本会入会后、その他の政党に加入して、本学会の名誉を妨害した場合、除名を宣告する」という規定があった。このことは、「社会的実践活動」を目指す政治的意識の強い会員と王との間で、根本理念をめぐる対立をひきおこすことになる。

一方で、「学会」の名称を掲げている結果、会内には、学術の専門家を志向する会員が、多数を占めていった。彼らは、政治活動に反対した。「学術団体」「社会的活動」を両翼にした「少中」のジレンマが以後、会員を悩ますこととなった。学理にもとづき社会事業をするという発起時に一体としてとらえられていた方針が動揺してくる。社会的活動は、政治活動を否定するものか、あるいは、容認するものか、「少中」は、主として学術団体なのか、それとも社会運動団体なのか、この2つの疑問が起こってくるのは、「宗旨」のもつ矛盾からくるものであった。

さらに加えて、成立大会直後、王が「社会的活動を行い、政治活動はしない」という取り決めを「不成文憲法」としたことが問題とされた。上海会員と北京会員との間で交わされた「会に影響を招来するような尖鋭な個人的な政治的発言は避ける」という、成立直後の「少中」が組織として生き残るために提出された戦術手段を、王は「少中」の不文律として強調し、これを根本理念に繰り入れ、「少中」の社会活動の範囲を限定する根拠とした。これが、王の専断と批判されるゆえんである⁴²。

③ 「少年中国の創造」——「民主」との関連から

「新宗旨」は、中国の社会を改革して二十世紀の新時代にふさわしい新国家「少年中国」を建設するという最終目的を掲げた。これは、「旧宗旨」の学術と社会事業による社会改革団体から、「新国家建設」という壮大な目標を掲げたといえるが、もちろんこれは最終目的である。新しく創造する「少年中国」は、進歩的で非保守的であり、創造的で非因習的であり、国際社会では若い国家で老国家であってはならないと、まず考えた⁴³。

「新宗旨」によって、王らの観念の中には、「新国家建設」の目標が、活動の前方に位置づけられたということが出来る。政治活動ではなく社会活動により、実現しようと考えた国家とはいかなるものであろうか。民主主義に対する彼らの認識から当時の彼らの国家意識を探ると、新旧「宗旨」には、新文化運動がスローガンとした「民主と科学」の「民主」の語句がないことに気づく。このことは、当時の民主の観念が、青年にどれほど影響を与えていたかを疑わせる事例である。

民主の観念を考える時、政治的原理と会員間の関係を規定する組織原理との二つから考えることができるが、成立当時、政治的原理は主義問題とみなされた。会員はそれぞれ奉じる主義が異なり、民主主義だけでなく、国家主義、社会主義、アナーキズムはすべて、王らの観念では、国家制度を意味していた⁴⁴。その意味において、政治的原理としての民主主義は、欧米の民主主義国家の制度であったのである。さらに、辛亥革命以来の民国の政治は、民主主義を導入したことにより混乱を導いた結果であると考えていた。王は「米国式の政治的民本主義は、結局大多数の幸福と関係がない」と考えており、王たち発起人は、政治的民主主義を、欧米の政治原理として否定していた⁴⁵。さらに、1921年の南京大会時期には、「会員はおおむね社会主義で一致している」といわれる状況であった⁴⁶。

一方、王、曾の二人は、組織内の会員関係では民主的原理をかなり意識していた⁴⁷。自分の思想を固く主張する自由な個人が集めた個人主義の組織で、会の内部では会員は意見を自由に論じ合う、その会風が賞賛されていた。このような積極的個人主義の集団が、一体になって協力しあい、「少年中国の創造」を担うまでになるには、多くの経験と歳月が必要であろう。

「少中」の前半(1921年南京大会時まで)は、民主に対する言及が極めて少な

かったが、南京大会へ康白情が規約改正の提案を行ない、宗旨に「民治」を入れることを提案した。彼の修正の意図は、会の民主的運営を確立することであったが、その提案は、参加者の支持は得られず、継続審議という結果になった⁴⁸。しかし、康の提案は、「民治」の解釈に対する転換をもたらし、以後、「民治」は、政治的内容を含んだ「デモクラシー」として、重要な論争テーマとなった。最終目的である「少年中国の創造」は、会の活動方針と関わる課題として常に会員の論議を招いた。

3. 王光祈の少年中国主義

(1) 王光祈の少年中国主義の特徴

1921年の南京大会に参加した劉衡如は、会員1人1人が「少年中国の創造」に対して描く観念が異なっていることに驚いた⁴⁹。「宗旨」制定時の執行部主任であった王は、「宗旨」の根本理念は、会員の「一致した認識」であるとしつつ、「少年中国」実現を掲げる運動の精神と理論を「少年中国主義」と名づけた。王は、自分の考えを、彼独自のものであると限定しているが、会員にも影響を与え、王の理論の基本的枠組みとなった⁵⁰。その内容は、以下の4点にまとめることができる。

① 国家主義の否定

「少年中国」の中国は、地域名称であり、自分たちが住み、自分たちが責任をもつ地域である。王は国家主義に反対し、国家主義に立つ近代国家を否定し、世界主義を主張した。

② 「予備功夫」(準備期間に行う仕事)⁵¹

中国国民の進化の水準を非常に軽視して永遠に進歩しないと考え、賢人政府を唱える当時の有力な見方と、その水準を高く評価する見方の2種を退ける。王は、中国人が未だ「人」となるべき性格と習慣を全く持っていないけれども、彼らを「予備功夫」によって将来「人」にすることができると考えた。「予備功夫」とは、新社会への準備過程において、団体生活や労働等の訓練を通じて中国人を「人」にするために講じる手段であり、仕事である。

彼は、北京や省都に住んで官吏の職を求めている高等遊民を、無頼漢(ごろつき)またはルンペンとも呼んで極めて嫌悪するとともに、多くの失業者、浮

浪者の存在を注視した。準備段階において、彼らを「人とする訓練」を行なうのが「少中」の教育や実業の分野の社会活動であり、この訓練期間を経て社会生活に適応させることができるとした。王は、国家の組織を一種の団体生活であると見ており、団体生活、労働はいかなる主義(制度)の下でもみな非常に必要で、中国人にはとりわけ必要であると考えた。将来の新社会が実現される時、準備期間において「予備功夫」が完成していれば、一般人は新社会の習慣をすでに身につけているので、社会の運用はうまくいくとした。

③ 「工読社会」

世界には知識階級・労働階級・資産階級の3つの階級があるとし、3階級の中から覚悟のある人を選び、階級間を接近させて、理想社会を実現する。彼が期待したのは、学生・海外出稼ぎ労働者(華工)と華僑であった。「工読社会」の理想は、「働きつつ学ぶ」という生活と工読互助団や新村運動に表現された。将来の新村の大連合が、少年中国である。

④ 農業的社会主義の建設

社会的活動とは、いわゆる社会運動で、社会教育と実業から着手し、持続的な努力によって改革を実現する運動である。王光祈は、実業では、農業を特に重視している。現在の世界では、工商国家の羽振りがいいが、最後の勝利は、農業国家にある。「農村改造」により、「農業に基礎を置く社会主義」を完成しようという⁵²。

(2) 社会改革論の形成に向けた王光祈の試み

1919年の王は、社会改革と徹底的個人主義を主張し、ロシア労農政府の強権政治に反対していた。工読主義を理想とし、彼が提唱した工読互助団は、北京だけでなく、各地の「少中」会員が取り組んだ⁵³。多くの賛同者を得たが、彼自身はその実践の結果には責任を取らなかった。1920年4月、工読互助団の失敗が伝えられていた時期、彼はヨーロッパ留学に向かう船上にあり、中国社会とはどのようなものかを自問していた。船中から、会員宛に出した手紙で、彼は次のように書いている⁵⁴。

私は日々社会改造、家庭改造、個人生活の改造を提唱し、社会事業に従事している。しかし、各地の社会の組織はどのようなものであるか、

家庭の状況はどうか、個人生活はどこから改めるべきか、社会事業は何かから取り組むべきかという問題は、詳しい確実な調査をしなければ、軽々しく改造を言っても人を欺くことになるであろう。現在、各種の主義、学説はみな我々の改革の参考になっても、実際の改革をしようとすれば各地の実際の状況を熟知しなければだめである。もし社会の実際の状況、即ち、何が必要か、何が必要でないか、何が必要であるがまだ猶予できるものであるかを知らずに、その主張を軽率に実行しようとするならば、その成功を望むことはできないであろう。

こうした反省を行うとともに、会員へ国内や世界を調査する旅行団を提案している。1920年1月より発行した「少中」の第2種機関誌の『少年世界』は社会調査の雑誌であった。当時、胡適は「社会問題の研究法」⁵⁵を書き、青年に社会問題の研究者や社会改良の実践家となるよう期待していた。

彼は、パリで、旧友の周太玄から「英雄名士思想の害毒にあたっている」という厳しい指摘を受け、自身の思想に対する深い自省を加えた⁵⁶。惲代英への手紙でも「自分はヨーロッパへ来てから思想が一変した」といっているが⁵⁷、それは、自身の中にある士大夫特有の強烈なエリート意識に気付くとともに、英雄観念に立った皮相な思想や事業を、古い観念の誤りとしたのである。

1920年5月、彼がマルセイユに到着し、そこで最初に見たものは、フランス交通労働者の強力なゼネストであり、そこでは「強力な労働者は強力な政府と対峙していた」。西欧諸国に見たものは、強力な労働運動だけではなく、文化的にも豊かな市民が作る堅固な市民社会であった。ヨーロッパの近代社会が第一次世界大戦を経ても、たちまちに復活を遂げる力強さに驚嘆し、次のように述べる⁵⁸。

民国9年、ドイツに留学し彼の国の政治経済を見て、一つとして社会の上に建設されていないものは無いことを知った。欧州各国の政治経済の勃興は、一二百年の間のことにしか過ぎないが、各種の文化設備や社会組織は、その土台が一つとして三四百年以前より植えつけられていないものはない。故にたびたびの戦争があっても、数年にして立ち上がり元気を回復するのである。彼らの社会組織は、これ程までに堅固であり、人民の能力はやはりこのように豊かである……。それゆえに、私は「中国

を改造するには社会から着手する」という思想を証明する実例を加えたのである。

王は、母国にいた時すでに、社会改革により中国を変えるという思想を抱いていた。ヨーロッパに来て、労働者の団結力の強固なことを見、「労働者」の「人」としての実力を知った。さらに加えて市民の作る文化的で豊かな市民社会が、三四百年間により、作り上げられたものであることを知り、中国人を「人」にすることと、中国の社会建設こそが必要であると考えた。彼が主張してきた社会活動の果たす重要な意義が改めて確信となったのである。彼は、ヨーロッパ社会に対する理解をさらに深め、社会構造に関する考察に進んでいった。ヨーロッパと中国の相違に対して考察することは、中国の独自性を自覚することにつながっていったのである。

(3)「中国社会」についての王光祈の試論

王の思想の根底には、『大学』の「修身齐家治国平天下」と伝統的な民本主義の思想があった。彼は自分の考え方について「私は元々深くいわゆる「修身齐家治国平天下」の改革順序を信じていて、古今中外、みなかくのごとくならざるものは無いと考えている」と、彼の思考の根底にある儒学の存在に触れている⁵⁹。

伝統儒学では、支配者として人格的修養を完成した士と被治者としての民が存在するだけである。そして、「修身」から「平天下」まで、個人一家一国家一天下までの一本の縦の関係でとらえられ、そこには、独立した個人と個人の横の関係という社会はない。「人民が第一」という考えも、民本主義に立つ治者の立場から行う善政であった。

これらの理念を根底に持ちつつも、新文化運動期の個人主義的な新思想の影響を受けて、さらに「社会」(Society)の存在を「発見」した。彼は、民国6・7年の境ごろ、内政の腐敗している中国を改造するには、まず社会の建設から着手しなければだめであると突然気づいた。「突然気づいた(原文;恍然大悟)」という表現は、直感的認識方法に立つ士人的思考を髣髴とさせる。彼が中国の現実の中で自らの生きる道を求めて奮闘していた時期、新語「社会」という言葉に敏感に反応した。それが、彼の社会運動への出発点であった。

「社会の発見」については、生松敬三氏が、「社会」という問題が自覚的に問題とされるようになるには、現実の社会の発展が前提とされなければならない、ヨーロッパにおいては、18世紀に社会という問題が人々に自覚されるようになったと指摘している⁶⁰。ヨーロッパにおいては、市民革命時この市民社会を媒介として、新興市民階級は絶対主義国家と対峙した。しかし、中国で社会が自覚される際には、ヨーロッパにおいて形成されていたような市民社会は未だ存在したわけではない。

新語「社会」の流行を批判した陶履恭⁶¹は、中国では、悪いことはみな「社会」のせいにしていているという。王の理解した「社会」は、前代からの「腐敗した社会」であり、近代産業社会を生み出した力のある市民社会ではなかった。それゆえ、彼の「社会」は「国家と対抗」する新勢力と意識されたのではなく、むしろ「万惡の原」と言っていた現実の腐敗した前近代社会を近代化する必要性が意識化されたのである。王たちは民国の現状をどのように見ていたのだろうか。

王は「ただ消費するだけで、生産しない中国人は、多分中国人口の半ばを越える」、「労働者の生産の一部分を資本家が略奪しているが、それを除くと、その余りの大部分は、非資本家の無業遊民に奪われている」と言う⁶²。王と認識を共にしていた張夢九は、中国の弱体の真因について次のように論じている⁶³。

現在中国の全国の人口は4億と称する。しかし、その実を考えると4億人の中には、数千年囚われて、やっと解放の兆しのある女性が約半分を占め、これを除くと2億人が残り、子供・精神喪失者や廃疾者が約4分の1を占め、これを除くと1億5千万である。その中には約十分のいくつかは、零落した政客、困窮した官僚、落ちぶれた文人、浮浪者となった元皇族、失業した労働者、倒産した商人、退役した軍人、こうした人とは異なる無頼漢(ごろつき)もいる。これらを除くと、数千万人が残るだけである。一国の中に職業のないものが多数を占めている。このような国や民族が、外国人の領土、外国人の奴隷にならないなどと言えようか。

王は、1920年9月、ヨーロッパ社会と中国を比較し「分業と互助」を書いた⁶⁴。彼は、近代の資本主義経済においては、分業の発展により生産力の拡

大が可能になったと見た。この分業は、産業面だけでなく、学術、社会運動などあらゆる面で適応できると考え、ヨーロッパ社会を分業で成立している社会と考えた。これは卓見であり、分業による中国社会の発展を展望した。さらに、彼は、分業と並立し、それとセットとなるのが互助であると言い、ヨーロッパと中国での互助の意味の違いを論じる。

互助の二字は元々生物学上の名詞であったけれど、中国では現在すでに、一般人の常用語(原文：「口頭禪」)として普及している。しかし、私の友人傅斯年君の言う「中国は無社会の国家である」という言によるならば、無社会の国家である中国では、当然互助の2字は問題にならない。

それでは、王が見たヨーロッパ人の社会、個人、互助とはどのようなものであろうか。西洋社会は個人の中の競争による冷酷無情な社会であり、彼らは、個人の利己主義により関係を結んでおり、利益のあるところ、父母兄弟といえども省みることがない。王は、ヨーロッパ人の互助とは知識から出発しているという。

彼らは、個人が社会から離れて独立した存在ではなく、もし互助がなければより大きな利益を得ることはできないことを知っている。彼らの互助は、利己心の範囲を拡大したもので個人がより大きな幸福を謀るものである。彼らは互助を手段とし、利己を目的にしている。故に外国の社会は、表面上は非常に団結し堅固であるが、内部では、個人と個人の間は即ち冷酷無情である。かくのごとく利己的な国民をもつてなおよく団体を愛護するゆえには、それは、互助がなければ自らの最大の欲望を達成することができないことを、彼らが知識として知っているからである。

王は、中国人が今後形成すべき社会は、外国人の互助を模範とするべきではなく、我々が必要な互助は、その基礎が道徳に立つものでなければならぬと言う。彼によると、本来、互助とは人類が行うべきことで、高度な発展段階においては、我々の「愛の本能」の衝動によって「本当の情け深い社会」が実現されるようになると論じる。

確かに王は、西洋の市民社会が個人の利己主義により関係を結んでいることを見抜いている。彼は、こうした西洋社会のような「個人が利益を介して形

成する社会」を中国人は持たないので、中国では逆に、修養による道徳を積んだ「人」が、互いに助け合う社会を造ることができると考え、それが中国の互助であり、ヨーロッパと異なる社会改革を中国に実現する道であると考えた。

「終身志業調査表」には、帰国後の事業として、「1926年に北京及びその近郊」で、「新村及び工読互助団」を建設すると回答している⁶⁵。さらに、1921年3月の恽代英への手紙では、民族主義への関心を吐露した⁶⁶。彼はやがて、個人主義に立脚する少年中国運動から、中華民族再生のため、文化運動を一切の社会運動の思想的中心とみなすにいたるのである⁶⁷。

おわりに——王光祈の中国社会改革論の行方——

彼の社会改革理論は、今日から見ると初歩的で空想的に見える。王は社会から政治を変えようとし、国家主義を否定し、近代国家の政治的課題には、言及しようとしなかった。最初から近代国家のイメージを描くことを放棄し、人と社会に対する考察に集中した。また、王汎森氏によると、王は、自らは学者でありながら「労働階級の成員になることを望んだ」といい、彼の工読主義が当時の知識階級の歴史的位を象徴していると指摘している⁶⁸。

彼の人間観は、中国人が蔑視されていた当時、「予備功夫」で「人」に改造できるという可能性を示し、民族生活の改善運動を呼びかけている。また、中国社会の調査研究を唱え、留学中の会員が新しい社会思想をもたらし、新しい中国改革理論を生み出すことを期待し励ました。自らは、分業と道徳を基礎に充実した力をもつ農業社会を構想した。

しかし、恽代英の提案を受けて1921年7月1日より4日間南京で開かれた第1回の全国大会は、少年中国運動の転換をもたらした⁶⁹。国内会員23人が参加したこの大会の意義は、「少中」が直面した諸問題を全国大会の場で討論するまでに、その運動が発展したことであった。「少中」の根本理念を論議するという一歩発展した段階に至ったこの大会が、逆に、「少中」の根本理念の動揺を生み、内部分裂へ向かわせたのである。

鄧仲澥(中夏)ら北京總會の一部会員は「宗旨は広範な内容で曖昧であり、統一した「主義」を採用するべきである」という提案を行い、討論は白熱して「少中」はあわや分裂かという対立状況を生んだという⁷⁰。南京大会では、統

一した主義は採用されなかったけれども、政治活動の自由が、出席者の多数で承認された。社会活動団体という「少中」の根本方針は揺らぎ始めた。南京大会は、少年中国主義に代わる新たな活動方針——それは1923年10月の蘇州会議で採用される「民族主義運動」——の出現の始まりであった。

王は、南京大会に出席できなかったが、政治活動反対の急先鋒であり、大会の「政治活動の自由化」の結論は、少数の出席者で決定した決議であり承認できないとして、ドイツから社会運動の意義を発議し続けた。実は、ドイツにあって1921年3月すでに、民族主義に傾斜し始めていた王は、国内の会員が、1923年の蘇州大会で決定した民族主義運動への転換を支持し、少年中国運動を中華民族復興運動であると再定義した⁷¹。国内の政治的变化に伴う会員の動向を受け入れることができたのは、彼の民族主義への転換と方向が一致していたからである。

しかし、民族主義実現の方法は違う。学費の要らない、生活の面倒もみる「平民学校や半工半読学校」を創立するという王に対して、すでに共産主義を奉じていた惲代英は、それは五六年前にすでに失敗しており、経済制度が変わらない以前は、実現不可能なことであると批判した⁷²。

1925年7月の南京大会では、国家主義者と共産主義者の対立を打開するため、改組委員会が組織された。対応策を一任された同委員会は、会内の統一を主張する王に、帰国して「少中」再建に尽力して欲しいと要請した⁷³。

これに対し、王は、1925年8月の会員への手紙で、「少中」の運動の目的は「真実の学術と社会事業の両種を用い、中国社会の基礎を造成し、しかる後に社会の実力にもとづき政治問題を解決する」ことにあり、その立場を訴え、自らの「会事の進行に対する意見書」を提出し会員に問うた⁷⁴。10月には「少年中国学会改組委員会調査表」に「自分は民族主義を採り、国家主義も共産主義も信じないが、最近の中国では、国家主義も共産主義も採るべき点がある。ただ行き過ぎなければ、自分はどちらにも賛成である」と、回答している⁷⁵。

王が民族主義の立場から国家主義・共産主義の両派とも共同しようと考えたことは重要な見識である。主義の違いを超えた協力共同は、「少中」の根本理念であり、彼の一貫した立場であった。しかし、彼の提案は国内の会員に受け止められず、結局王は帰国要請を受けなかった。母国で「少中」の仲間と、

中国の社会建設に参加するという彼の本来の希望を断ち切ったのである。

本稿を終えるにあたり、「少中」と王の歩みを振り返り、筆者は次の諸点をその歴史的な役割として指摘しておきたい。まず、彼らが社会改革運動を進める上で直面した課題は、古い政治勢力と決別することであった。古い政治勢力とは、辛亥革命以来の政党⁷⁶であり、また、彼らが無頼漢、ゴロツキと批判する政治家であった。そのために、自らに課したのが、政治活動の禁止であった。彼らが独立した運動を行うには、政治活動の禁止は不可欠であった。古い勢力と関係を絶つには、経済的自立により「少中」の独立を確保し、会員が近代的職業人として自らを形成しなければならない。この困難な道を彼らは全力で実践しようとした。ここに、新文化運動期、新勢力「少中」の運動の清新さがあった。

1920年前後の北京政府下では、海外への窓が広く開かれて、「少中」のような自立した知識青年の団体が、海外の会員と連携して存続することが可能となった。前近代的な士大夫意識に導かれながらも、個人主義、自由主義の気風が会員に定着し、独立の精神が芽生えたことは、以後の近代的民族文化の形成や中国社会の分析へ道を開いた。

「少中」の内部論争から窺えるように、新文化運動期の思潮には、共産主義や保守主義に収斂されるだけでなく、個人主義的で改良主義的な改革運動を志向する傾向も存在した。会内の共産主義派、国家主義派も、「少中」の個人主義、自由主義の洗礼を受けており、それらは、現代につながる「思想の遺産」でもある⁷⁷。新文化運動が、思想と文化の変革を掲げたのに続き、「少中」が「少年中国の創造」を掲げて、社会改革を中国近代の実践的課題として提起した意味は大きいと考える。

注

- 1 少年中国学会は、これまで1925年末に活動を停止したとされた(張允侯・殷叙彝・洪清祥・王雲開等編『五四時期的社团』(一)、生活・読書・新知三聯書店、1979年、218頁)。改組委員会の黄仲蘇によると、1926年3月開かれた改組委員会の会議で、会員に実施した調査票を回収した結果、全

- 体の三分の一弱しか届かなかつたため、慎重な検討の後、やむを得ず会務の一時停止を決定したと記している(黄仲蘇「王光祈与少年中国学会」、左舜生等著『王光祈先生紀念冊』文海出版社、1968年、附5～9頁)。
- 2 諸説あるが、「少中」の活動期間中に途中で死亡又は退会した会員も含めて116名の秦説を採る(秦賢次「關於「少年中国学会」會員名録」、『伝記文学』第35卷第2期、1982年)。
 - 3 王汎森「近代知識份子自我形象的轉變」、『台大文史哲學報』、1996年12月。
 - 4 「少年中国学会規約」前掲『五四時期的社團』(一)。
 - 5 王「本会発起之旨趣及其經過情形」(1919年5月)、前掲『五四時期的社團』(一)。
 - 6 張夢九「憶少年中国学会」『伝記文学』第35卷第2期、1982年。
 - 7 余英時「中国近代思想史上的激進与保守」、李世濤主編『激進与保守之間の動蕩』、時代文芸出版社、2002年。
 - 8 袁偉時「回答对新文化運動的三大責難」、『複印報刊資料中国現代史』、2004年12月。
 - 9 耿雲志『近代中国文化轉型研究導論』、四川人民出版社、2008年、前言8～9頁。並木頼寿氏は、耿雲志のこの著作を中国の近代史研究の新傾向として注目しつつも、「五四運動後に展開する人民革命の歴史を「頓挫と曲折」の時期とみなすのであろうか」との疑義を提出している。(並木頼寿、井上裕正『中華帝国の危機』、中央公論新社、2008年、463～466頁)。
 - 10 小野信爾「五四運動前後の王光祈」、『花園大学研究紀要』22号、1990年。
 - 11 石川啓二「中国に於ける教育独立論の系譜——少年中国学会と国家主義派」、『山梨大学教育学部紀要』7、1993年。
 - 12 牛嶋憂子『王光祈文献総目録——付著訳年譜——』、(アジア文化総合研究所出版会、2007年)、同「日中における王光祈研究の現状と課題」、(『客家与多元文化』第5号、2009年)。なお、王光祈の経歴などについては、後藤延子「王光祈」(山田辰夫編『近代中国人人名辞典』、霞山会、1995年)

- を参照。
- 13 吳小龍『少年中国学会研究』、上海三聯書店、2006年。
 - 14 陳氏は、「少中」を「理想主義的で、情熱で結ばれたロマン主義団体であり、理想と現実の衝突の結果、その運動は雲散霧消してしまった」と、評した(陳曉林「五四時代理想与現実的衝突——以少年中国学会為例」、汪榮祖主編『五四研究論文集』聯經出版公司、1979年)。
 - 15 少年中国学会評価は、『五四時期期刊紹介』(第一集)「少年中国」において早く規定されていた(中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編著『五四時期期刊紹介』(第一集)、人民出版社、1958年)。革命史の観点からは、知識階層の中で主義の争いが典型的に展開された組織とみなされた。「少中」の綱領は、極めて曖昧であり、組織の目的が不明確であったとみなされたが、この否定的な評価は、実は北京総会の鄧仲澗(中夏)の言から招来したものであり、当時の多様な立場を包摂する「少中」の実態を反映したものではなかったと筆者は考える。
 - 16 前掲吳小龍『少年中国学会研究』、107頁。
 - 17 狹間直樹訳・解説「少年中国」的「少年運動」——李大釗『革命論集』(中国文明選第15巻)、朝日新聞社、1972年。齊藤道彦「五四時期の思想状況——李大釗の少年中国主義」、『講座中国近代史』4、東京大学出版会、1978年。
 - 18 郭正昭・林瑞明『王光祈的一生与少年中国学会』、百傑出版社、1978年。
 - 19 「少中」発起人の陳愚生は、王がドイツに出発した後、執行部主任に、周太玄は、1919年2月にフランスへ留学、パリ通信社を組織した。雷宝箒は、東京で病死した。
 - 20 章太炎の講演「今日之青年之弱点」の概要は、胡適が講演「少年中国之精神」冒頭で紹介している。胡適の講演「少年中国之精神」、(胡明主編『胡適精品集』第9巻、光明日報出版社、1998年)。陳独秀の講演「我們應該怎麼樣」、(『新青年』第6巻4号「録少年中国学会会務報告」、1918年4月)。胡適の紹介で、「少中」の出版物は、上海の亜東図書館に委託出版できるようになり、販路が拡大した。

- 21 王が、文中で青年イタリアに言及しているのは、前掲「本会発起之旨趣及其経過情形」と『少年中国運動』序言(1924年3月)においてである。「『少年中国運動』序言」、四川音楽学院・成都市温江区人民政府編『王光祈文集——時政文化卷』(『王光祈文集』第4卷)、四川出版集團・巴蜀書社、2009年(原載は王『少年中国運動』、中華書局、1924年)。
- 22 前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 23 陶履恭「社会」、『新青年』第3卷第2期、1917年4月。
- 24 梁啓超「政治之基礎与言論家之指針」、梁啓超撰『飲冰室合集』4、(飲冰室文集之三十三)、中華書局、2008年。
- 25 王「社会的政治改革与社会的社会改革」、『少年中国』第3卷第8期、1922年3月。
- 26 傅斯年「社会——群集」、『新潮』第1卷第2期、1919年2月。傅斯年の社会論については、王汎森「傅斯年早期的「造社会」論——從两份未刊殘稿談起」、『中国文化』第14期、1996年12月を参照。
- 27 当時、李大釗の北京大学図書館の執務室は、学生のたまり場であった。傅斯年「追憶王光祈先生」、前掲左舜生等著『王光祈先生紀念冊』。
- 28 上海の震旦学校で曾琦と同学であった左舜生は、中華書局の編集者で上海に居住、蘇演存の後任として『少年中国』発行停止まで編集主任を務め、「少中」の国内活動の要であった。
- 29 王「致太玄、幼椿、慕韓、調元」、『少年中国』第1卷第6期「會員通訊」、1919年12月。王は、1919年1月、10月に上海、南京、濟南、天津、武漢を訪ねて有力な青年を「少中」に入会させている。
- 30 蘇演存は、北京大学出身、王の後、『少年中国』の編集主任となった。鄧仲灝(中夏)と惲代英は、1920年初めより北京總會の活動に積極的に関わった。陳啓天は南京分会の中心メンバーである。
- 31 1918年の規約は、明文としては残っていないため、その内容を知るには、1919年の改正「少年中国学会規約」と「本会通告、關於修改学会宗旨的通告」を参照。ともに前掲『五四時期的社団』(一)。
- 32 「本会征求會員之標準」、前掲『五四時期的社団』(一)。

- 33 王「在吳淞同濟學校的講話」(1919年1月23日)、前掲『五四時期的社團』(一)。前掲「本會發起之旨趣及其經過情形」。
- 34 王は、中国大学では政治学を専攻したが、当時「社会主義思想に興味を抱き、社会主義の研究のためには経済学研究が必要である」として経済学を志望していた。ドイツ留学も経済学研究のためであった。音楽史研究に転じるのは1922年である。
- 35 前掲王「在吳淞同濟學校的講話」。
- 36 李璜は、四川省成都出身、震旦学校で曾琦と同学。パリ通信社を組織。
- 37 王「会務紀聞、少年中国学会成立大会」、『少年中国』第1巻第1期、1919年7月。前掲「本會通告、關於修改学会宗旨的通告」。
- 38 「少年中国学会消息、北京方面的報告」、『少年中国』第2巻第2期、1920年8月。康は「少中」成立一周年記念の集会で、「少中」規約の改正を提案した。康は、四川省出身、北京大学学生で『少年中国』の編集部副主任。『新潮』同人でもあった。
- 39 前掲吳小龍『少年中国学会研究』、31頁。
- 40 「ただ外交を問い、内政には関わらない」という五四運動の学生に対して、王は社会改革の立場から、批判的だった。五四運動で共同しながらも、立場の違いを窺うことができる。前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 41 会員の当時の志望は、「終身志業調査表」を参照、前掲『五四時期的社團』(一)。工業技術関係志望もいるが、ほとんどの会員が教育、著作活動を志望していた。
- 42 上海会員と王との書簡は、「会員通訊」、(『少年中国』第1巻第1期、1919年7月)に、康の書簡は、「会員通訊」、(『少年中国』第3巻第2期、1921年9月)にある。康の書簡には、王光祈の会務への批評がある。
- 43 前掲王「本會發起之旨趣及其經過情形」。
- 44 王「少年中国学会之精神及其進行計画」、『少年中国』第1巻第6期、1919年12月。
- 45 「易家鉞(君左)致慕韓 夢九」(1919年3月)「王光祈致君左」(1919年5月)前掲『五四時期的社團』(一)291～294頁。曾琦・張夢九への手紙と王光祈

から易君左への手紙の2つの書簡から、会員の民本主義(デモクラシー)への関心が窺われる。アメリカの政治的民本主義とロシアの社会的民本主義を区別して理解をしようとしていた。彼らは、日本にいた易君左から当時の新理論を吸収しようとした。

- 46 王「政治活動与社会活動」(1921年10月)、『少年中国』第3卷第8期、1922年3月。
- 47 曾琦は「以前の団体は多く首領を重んじ、団員を軽んじた。我々の団体はみな一律平等でいわゆる首領人物がない」と言っている(曾琦「留別少年中国学会同人」、『少年中国』第1卷第3期、1919年9月)。また、王も「少中」の組織が「完全にデモクラシーの精神である」と誇っていた(前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」)。
- 48 「少年中国学会規約修正案」、『少年中国』第3卷第2期、1921年9月。南京大会(1921年7月)へ康白情が提案した「規約改正案」は、「宗旨」の項に「民治」を挿入して、第2条本学会の宗旨を「科学と「民治」の精神に基づき、社会的活動を行い、以って「少年中国」を創造する」と修正することであった。これに反対し「少中」を退会したのが、当時、共産党の建党に携わっていた張崧年(申甫)である。彼は「少年中国創造」の理念を共有しながらも、自分は「労働者の政治」は理解できるが、「民治」は「資本家の政治」であり、全く理解できないと批判した。彼の退会声明書(1921年9月20日作成)は『新青年』第9卷第6号「編集室雑記」、1922年7月にある。
- 49 劉衡如は、金陵大学卒で南京分会に所属していた。「少年中国学会問題」、『少年中国』第3卷第2期、1921年9月。
- 50 王「「少年中国」之創造」、『少年中国』第1卷第1期、1919年7月。前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。
- 51 「予備功夫」の日本語訳として、小野信爾氏が「準備の仕事」と訳している(前掲小野信爾「五四運動前後の王光祈」)。王だけでなく「少中」会員はそれぞれ「予備功夫」に言及しているが、そこでは、一定の時間的範囲をもった準備期間に行う社会的活動を意味し、「少中」の活動上重要な意味を占める概念であった。(李璜「破壊与建設及予備功夫」、「再譚對於少年中国的予備功夫」、『少年中国』第3卷第8期、1922年3月など)。

- 52 前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 53 吳氏によると「工読互助主義は、互助論を核心にしたアナーキズムを理論的基礎にし、工読主義、新村主義を総合した一種の中国式の空想社会主義の思潮」とする。前掲呉『少年中国学会研究』72頁。
- 54 王「致「少年中国学会」諸同志」(1920年4月)、『少年中国』第2巻第1期、1920年8月。
- 55 胡適「研究社会問題的方法」、前掲『胡適精品集』第9巻、42～55頁。
- 56 王「旅欧雑感」、『少年中国』第2巻第5号、1920年11月。
- 57 王「致惲代英」(1921年3月)、『少年中国』第2巻11期、1921年5月。
- 58 前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 59 前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 60 生松敬三『社会思想の歴史——ヘーゲル・マルクス・ウェーバー』岩波現代文庫、2002年、2頁。
- 61 前掲陶「社会」。
- 62 前掲王「少年中国学会之精神及其進行計画」。
- 63 張夢九「主義問題与活動問題」、『少年中国』第3巻第8期、1923年3月。
- 64 王「旅欧通信、分工与互助」(1920年9月)、『少年中国』第2巻第7期、1921年1月。
- 65 前掲「終身志業調査表」。「終身志業調査表」は、1920年10月から1921年11月にかけて実施され、62名が回答した。「生涯の専門研究分野または事業、開始する予定時、生活維持方法」の調査項目があり、当時の会員の研究や事業への志向、職業志望などを知ることができる。
- 66 前掲王「致惲代英」。
- 67 王『『欧州音楽進化論』自序』(1923年11月)、前掲『王光祈文集——音楽巻(上)』(『王光祈文集』第1巻)。
- 68 前掲王汎森「近代知識份子自我形象的轉變」17頁。
- 69 前掲「少年中国学会問題」、南京大会の詳細な報告と会員の紙上討論を掲載している。
- 70 前掲「少年中国学会問題」、この大会では、惲代英が、両派の間の調停役であった。

- 71 前掲王「『少年中国運動』序言」。
- 72 惲代英「書評『少年中国運動』」(1924年11月)、前掲『五四時期的社団』(一)。
- 73 前掲『五四時期的社団』(一)、514~515頁。
- 74 王「致少年中国学会同志書」(1925年8月31日)、前掲『王光祈文集——時政文化卷』、503頁。
- 75 「少年中国学会改組委員会調査表」、前掲『五四時期的社団』(一)。「調査表」に回答した王の民族主義の主張は、中華民族の独立と自由を闘いとる事である。中華民族とは、漢、滿、蒙、回、藏の五族を統一した総称である。
- 76 前掲王「社会的政治改革与社会的社会改革」。王は、国民党や進歩党には少数の優れた人物がいるにはいるが、他の大部分は「無頼漢や悪徳紳士」からなるといっている。
- 77 黄興濤(川尻文彦訳)「清末民初、新名詞・新概念の「現代性」問題——「思想現代性」と現代性を帯びた「社会」概念の中国での受容」、『現代中国研究』第17号、2005年9月。